

マニュアルとの差分は以下のとおりです。

対象バージョン: DPM Ver6.121

1. 全体

- ・ 特に明記が無い限り Red Hat Enterprise Linux 8 の手順は Red Hat Enterprise Linux 7 の手順に準じます。
- ・ Red Hat Enterprise Linux 9 については、ディスク複製 OS インストール機能のみサポートします。
- ・ Red Hat Enterprise Linux 5/5 AP は、サポート対象外となりました。
- ・ 一括ファイル配置機能については、「一括ファイル配置ガイド」を参照してください。
- ・ Windows PE 版 Deploy-OS を利用する場合は、「Windows PE 版 Deploy-OS の利用ガイド」を参照してください。
- ・ 一括 OS 展開を利用する場合は、「一括 OS 展開の利用ガイド」を参照してください。

2. WebSAM DeploymentManager ファーストステップガイド

- ・ 2.1.2. DeploymentManager のコンポーネント構成
 - 「■ 管理サーバ側のコンポーネント」の表のASP.NETについては、以下の内容に変更となります。

ASP.NET		必須です。 以下のいずれかが必要となります。 <ul style="list-style-type: none">・ Windows Server 2022の場合: ASP.NET 4.8以降・ Windows Server 2019の場合: ASP.NET 4.7以降・ Windows Server 2016の場合: ASP.NET 4.6以降・ Windows Server 2012/ Windows Server 2012 R2の場合: ASP.NET 4.5以降
---------	--	---

- ・ 2.3.1.1. 各コンポーネントのバージョン確認方法
 - 「・DPMクライアント(Linux)」
は以下の内容に変更となります。
 - ・DPMクライアント(Linux)
以下のコマンドを実行して、表示されるバージョンを確認してください。
cd /opt/dpmclient/agent/bin
./depagtd -v
または、
/opt/dpmclient/agent/bin/depagtd -v

例)
DeploymentManager Ver6.7

- ・ 2.3.2. 製品の構成およびライセンス
 - 表のサーバーターゲットライセンス、クライアントターゲットライセンスについては、以下の内容に変更となります。

WebSAM DeploymentManager Verx.x サーバーターゲットライセンス(1)	管理対象マシンがサーバOSの場合に必要なライセンスです。 例) <ul style="list-style-type: none">・ Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows
--	---

WebSAM DeploymentManager Verx.x サーバーターゲットライセンス(5)	Server 2016/Windows Server 2019/Windows Server 2022 は、サーバ OS です。 <ul style="list-style-type: none"> OS が Linux(Red Hat Enterprise Linux/SUSE Linux Enterprise)の場合は、サーバライセンスとなります。 例えば、Windows Server 2019 がインストールされた管理対象マシンを 10 台管理する場合は、10 サーバライセンス(5 サーバライセンス×2 本、または 5 サーバライセンス×1 本+1 サーバライセンス×5 本、または 1 サーバライセンス×10 本)が必要です。
WebSAM DeploymentManager Verx.x サーバーターゲットライセンス(20)	
WebSAM DeploymentManager Verx.x クライアントターゲットライセンス(1)	
WebSAM DeploymentManager Verx.x クライアントターゲットライセンス(10)	
WebSAM DeploymentManager Verx.x クライアントターゲットライセンス(50)	
WebSAM DeploymentManager Verx.x クライアントターゲットライセンス(100)	管理対象マシンがクライアントOSの場合に必要なライセンスです。 例) - Windows 8.1/Windows 10/Windows 11はクライアントOSです。 例えば、Windows 10がインストールされた管理対象マシンを20台管理する場合は、20クライアントターゲットライセンス(10クライアントターゲットライセンス×2本、または10クライアントターゲットライセンス×1本+1クライアントターゲットライセンス×10本、または1クライアントターゲットライセンス×20本)が必要です。

3.8.2. 注意事項

- 「管理対象マシンがLinuxの場合について」
 - 「Red Hat Enterprise Linux5/5 AP/6/7, SUSE Linux Enterprise 11のbondingドライバに対応しています。」は以下の内容に変更となります。
 - Red Hat Enterprise Linux6/7/8/9, SUSE Linux Enterprise 11のbondingドライバに対応しています。

付録 A 機能対応表

- 「管理対象マシンのOS毎の対応状況」
 - 表「機能対応表(Windows OS)」の機能は以下の内容に変更となります。

機能	Windows Server 2012/ Windows Server 2012 R2/ Windows Server 2016/ Windows Server 2019/ Windows Server 2022/ Windows 8.1/ Windows 10/ Windows 11
----	--

- 表「機能対応表(LinuxOS)」の機能は以下の内容に変更となります。

機能	Red Hat Enterprise Linux 6/7/8/9	SUSE Linux Enterprise 11
----	----------------------------------	--------------------------

付録 A 機能対応表

- 「仮想環境を管理対象マシンとした場合の対応状況」
 - 「仮想化ソフトウェア」
 - 「VMware ESXi 5.5/6/6.5/6.7 の仮想化ソフトウェアに対する機能対応表は以下のとおりです。」と、表の機能は以下の内容に変更となります。
 - VMware ESXi 6/6.5/6.7/7.0の仮想化ソフトウェアに対する機能対応表は以下のとおりです。

機能	ESXi 6/6.5/6.7/7.0
----	--------------------

- 「VMware ESXi 5.5/6/6.5/6.7 の仮想化ソフトウェアに対する機能対応表は以下のとおりです。」の「※1 SSC 向け製品で Legacy BIOS モードのマシンに対して OS クリアインストールできます。～」は以下の内容に変更となります。

※1 SSC向け製品でOSクリアインストールできます。詳細は、SigmaSystemCenter 仮想マシンサーバ(ESXi)プロビジョニング ソリューションガイドを参照してください。

- 「■ Hyper-V1.0/2.0,Windows Server 2012 Hyper-V, Windows Server 2012 R2 Hyper-V, Windows Server 2016 Hyper-V, Windows Server 2019 Hyper-Vの仮想化ソフトウェアに対する機能対応表は以下のとおりです。」
と、表の機能は以下の内容に変更となります。
- Windows Server 2012 Hyper-V, Windows Server 2012 R2 Hyper-V, Windows Server 2016 Hyper-V, Windows Server 2019 Hyper-V, Windows Server 2022 Hyper-Vの仮想化ソフトウェアに対する機能対応表は以下のとおりです。

機能	Windows Server 2012 Hyper-V, Windows Server 2012 R2 Hyper-V, Windows Server 2016 Hyper-V, Windows Server 2019 Hyper-V, Windows Server 2022 Hyper-V
----	--

- ・ 付録 A 機能対応表
 - 「仮想環境を管理対象マシンとした場合の対応状況」
 - 「ゲスト OS」
 - 「■ VMware ESXi 5.5/6/6.5/6.7のゲストOSに対する機能対応表は以下のとおりです。」
と、表の機能は以下の内容に変更となります。
 - VMware ESXi 6/6.5/6.7/7.0のゲストOSに対する機能対応表は以下のとおりです。

機能	VMware ESXi 6/6.5/6.7/7.0のゲストOS(※1)	
	Windows	Linux

- 「■ Hyper-V1.0/2.0,Windows Server 2012 Hyper-V, Windows Server 2012 R2 Hyper-V, Windows Server 2016 Hyper-V, Windows Server 2019 Hyper-VのゲストOSに対する機能対応表は以下のとおりです。」
と、表の機能は以下の内容に変更となります。
- Windows Server 2012 Hyper-V, Windows Server 2012 R2 Hyper-V, Windows Server 2016 Hyper-V, Windows Server 2019 Hyper-V, Windows Server 2022 Hyper-VのゲストOSに対する機能対応表は以下のとおりです。

機能	Windows Server 2012 Hyper-V, Windows Server 2012 R2 Hyper-V, Windows Server 2016 Hyper-V のゲストOS, Windows Server 2019 Hyper-V のゲストOS, Windows Server 2022 Hyper-V のゲストOS	
	Windows	Linux

- ・ Windows PE版Deploy-OSを利用する場合は、以下の章に変更があります。「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド」を参照してください。
 - 2.4. DeploymentManager 運用までの流れ
- ・ 一括OS展開を利用する場合は、以下の章に変更があります。「一括OS展開の利用ガイド」を参照してください。
 - 2.4. DeploymentManager 運用までの流れ

3. WebSAM DeploymentManager インストレーションガイド

- ・ 1.2.1. インターネットインフォメーションサービス(IIS)をインストールする
 - 「注:」の「■ Windows Server 2012/ Windows Server 2012 R2の場合は、～」は以下の内容に変更となります。

- Windows Server 2012/ Windows Server 2012 R2の場合は、「ASP.NET 4.6」を「ASP.NET 4.5」に読み替えてください。
Windows Server 2019の場合は、「ASP.NET 4.6」を「ASP.NET 4.7」に読み替えてください。
Windows Server 2022の場合は、「ASP.NET 4.6」を「ASP.NET 4.8」に読み替えてください。

2.1. DPM サーバをインストールする

「■ データベース(SQL Server)」の

- 「■ SQL Server のインスタンスとして既存のインスタンスを使用する場合は、～」

は以下の内容に変更となります。

- SQL Server のインスタンスとして既存のインスタンスを使用する場合は、同梱製品(SQL Server 2019 Express)のインストールは行わず、既存のインスタンス上に DPM という名前でデータベースファイルをインストールします。指定されたインスタンスが作成されていない環境の場合は、同梱製品(SQL Server 2019 Express)以外の SQL Server がインストール済みでも、SQL Server 2019 Express を新規にインストールして、インスタンスを作成します。

- 「■ DPM サーバの OS が Windows Server 2008 R2 のように同梱製品(SQL Server 2017 Express)の～」

は以下の内容に変更となります。

- DPMサーバのOSがWindows Server 2016より前のOSのように同梱製品(SQL Server 2019 Express)の対象OSでない場合は、DPMサーバをインストールする前に、Microsoft社の以下のWebページを参照して、OSがサポート対象としているSQL Serverを確認の上、データベースの構築とインスタンスの作成を行ってください。なお、使用しているSQL Serverの製品バージョン専用のWebページがある場合は、そちらを参照してください。

<https://learn.microsoft.com/ja-jp/sql/database-engine/install-windows/install-sql-server-from-the-installation-wizard-setup?view=sql-server-ver15>

- 「(10) 以下の画面が表示されますので、使用するデータベース環境に合わせて設定を行ってください。」の

「■ DPM サーバの OS が Windows Server 2008 R2 の場合は、～」の注意事項は、以下の内容に変更となります。

- DPMサーバのOSがWindows Server 2016より前のOS の場合は、同梱製品(SQL Server 2019 Express)は使用できません。

2.2.2. Linux(x86/x64)版をインストールする

DPM クライアントの動作に必要なライブラリは、以下の内容に変更となります。

	x86	x64
DPMクライアントのインストール	<ul style="list-style-type: none"> libpthread.so.0 libc.so.* ld-linux.so.* 	<ul style="list-style-type: none"> libpthread.so.0(※1) libc.so.*(※1) ld-linux.so.*(※1) /lib/libgcc_s.so.1(※4)
ディスク複製OSインストール	<ul style="list-style-type: none"> libcrypt.so.* libfreebl3.so 	<ul style="list-style-type: none"> libcrypt.so.*(※2) libfreebl3.so(※3)

※1 Red Hat Enterprise Linux 6以降で、必要なライブラリが存在していない場合は、以下のrpmをインストールしてください。

- glibc-*.i686.rpm(※5)

※2 Red Hat Enterprise Linux 8以降で、必要なライブラリが存在していない場合は、以下のrpmをインストールしてください。

- libxcrypt-*.i686.rpm(※5)

Red Hat Enterprise Linux 6/7で、必要なライブラリが存在していない場合は、以下のrpmをインストールしてください。

- glibc-*.i686.rpm(※5)

※3 Red Hat Enterprise Linux 6以降で、必要なライブラリが存在していない場合は、以下のrpmをインストールしてください。

- nss-softoken-freebl-*.i686.rpm(※5)

※4 以下のrpmのいずれかをインストールしてください。

- libgcc-*.i386.rpm(※5)
- libgcc-*.i686.rpm(※5)

※5 パッケージのインストール時にパッケージの依存関係を無視するオプション(--nodeps)を指定した場合は、必要なパッケージがインストールされていない可能性がありますので、注意してください。

なお、Compatibility libraries(x64のOS環境でx86用モジュールを動作させるためのライブラリ)をインストールした場合は不要です。

- 3.1.1. アップグレードインストール実行前の注意
 - 「■ 以下のアップグレードインストールができます。」は以下の内容に変更となります。
 - 以下のアップグレードインストールができます。
 - DPM Ver6.3 以降の DPM 単体製品から、DPM 単体製品へのアップグレードインストール
DPM Ver6.3 より前のバージョンの場合は、一度 DPM Ver6.3 ～ 6.8 にアップグレードする必要があります。
 - SSC3.3(DPM Ver6.3)以降の SSC 向け製品から、SSC 向け製品へのアップグレードインストール
- 3.2. DPM サーバをアップグレードインストールする
 - 「注:」に以下の内容を追加します。
 - アップグレードインストール前に、以下のサービスのログオンアカウントとそのパスワードを設定していた場合は、アップグレードインストール後に再設定してください。
 - DeploymentManager API Service
 - DeploymentManager Schedule Management
- 付録 E PostgreSQL のデータベースを構築する
 - 「■ 管理サーバと同一マシン上にデータベースを構築する」の
「(3) 以下のファイルを編集してください。」
と
「■ 管理サーバとは別のマシン上にデータベースを構築する」の
「(4) 以下のファイルを編集してください。」
の編集内容は、以下の内容に変更となります。

パラメータ	既定値	推奨値
log_line_prefix	'%t '	'[%m, %d, %u, %p, %x] '
log_rotation_size	10MB	0(無制限)
log_truncate_on_rotation	off	on

- 付録 G LDAP サーバを使用して Web コンソールにログインする
 - 「・Windows Active Directory(Windows Server 2008～)」は以下の内容に変更となります。
 - ・Windows Active Directory(Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016/Windows Server 2019/Windows Server 2022)
- 以下の章に変更があります。「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド」を参照してください。
 - 2.1. DPM サーバをインストールする

4. WebSAM DeploymentManager オペレーションガイド

- 2.2.1.1. 管理対象マシンの情報を自動取得して登録する
 - 「<PXEブートを行う>」の「(2) PXEブートに対応している管理対象マシンの場合は、～」
に以下の注意事項を追加します。

注:

- forceskip.iniを変更した場合は、DPMサーバの下記のサービスを再起動してください。
DeploymentManager PXE Management
-

- 3.3.1.3. マスタイメージ作成の準備をする
 - 「注:」の
「■ Windowsビルトインのストアアプリを更新、またはアンインストールした状態で、～」
は以下の内容に変更となります。
 - Windowsビルトインのストアアプリを更新、またはアンインストールした状態で、Windows 8.1/Windows 10/Windows 11のディスク複製OSインストールを行うと、Sysprep実行中にエラーが発生する場合があります。
- 3.4.1.3. マスタイメージ作成の準備をする
 - 「注:」の

「■ ディスク複製用情報ファイルで指定した DNS 設定を反映させるために、以下の設定をしてください。～」は以下の内容に変更となります。

■ ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定を反映させるために、以下の設定をしてください。

対象のOSがRed Hat Enterprise Linux 7以前の場合は、ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定を反映させるために、以下の設定をしてください。NetworkManager daemonを有効にすると、ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定が反映されません。

- Red Hat Enterprise Linux 7

- 1) NetworkManagerのステータスを確認します。

```
#systemctl status NetworkManager
```

(実行結果例)

```
Active: active (running)
```

- 2) 出力結果に「Active: active (running)」と表示されたことを確認後、以下のコマンドをroot権限で実行してNetworkManagerを無効にします。

```
#systemctl disable NetworkManager
```

```
#systemctl daemon-reload
```

```
#systemctl stop NetworkManager
```

- 3) /etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-Auto_Ethernet*ファイルを削除します。

```
#cd /etc/sysconfig/network-scripts
```

```
#rm -f ifcfg-Auto_Ethernet*
```

- Red Hat Enterprise Linux 6 以前

- 1) NetworkManagerの起動レベルを確認します。

```
#chkconfig --list NetworkManager
```

(実行結果例)

```
NetworkManager 0:off 1:off 2:on 3:on 4:on 5:on 6:off
```

- 2) 出力結果に一つでも「on」と表示された場合は、以下のコマンドをroot権限で実行して、無効にします。

```
#chkconfig NetworkManager off
```

- SUSE Linux Enterprise 11

(システムの管理ツール「YaST」で設定できます。)

- 1) 「YaST」→「Network Devices」→「Network Settings」→「Network Settings」の画面を開きます。

- 2) 「Global options」タブ-「Network Setup Method」で、「Traditional Method with ifup」にチェックを入れて、「OK」をクリックします。

・ 3.4.1.3. マスタイメージ作成の準備をする

「注:」の

「■ Red Hat Enterprise Linux の場合」

は以下の内容に変更となります。

■ Red Hat Enterprise Linuxの場合

・Red Hat Enterprise Linux 9以降

コマンド `ip addr show` で確認できるデバイス名と下記のファイルにデバイス名が一致しない場合は、マスタイメージの作成に失敗します。

・ /etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-*ファイル

※ifcfg-*ファイルに

「DEVICE=xxx」(xxx: デバイス名)

・ /etc/NetworkManager/system-connections/*.nmconnectionファイル

※*.nmconnectionファイルに

「interface-name=xxx」(xxx: デバイス名)

あるいは

「mac-address=xx:xx:xx:xx:xx:xx」(xx:xx:xx:xx:xx:xx: デバイスのMACアドレス)

・Red Hat Enterprise Linux 7 / 8

コマンド `ip addr show` で確認できるデバイス名と下記のファイルのデバイス名が一致しない場合は、マスタイメージ

の作成に失敗します。

/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-*xxx* (*xxx*: デバイス名)

・Red Hat Enterprise Linux 7より前

下記のファイルが存在しない場合は、マスタイメージの作成に失敗します。

/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-eth*n* (*n*: デバイス番号)

3.4.1.3. マスタイメージ作成の準備をする

「注:」に以下を追加します。

■ Red Hat Enterprise Linux9の場合

nmcli connectionコマンドを実行して、Connection名が256バイト以内になっているかを確認してください。256バイト以内でない場合は、nmcli connectionコマンドを実行して、256バイト以内に設定してください。

3.6.4. シナリオを実行する

「注:」に以下を追加します。

■ シナリオの設定で「シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする」にチェックを入れている場合でも、一部機種においてPXEブート時の電源OFFができずマシンが起動する場合があります。

マシンが電源OFFできずに起動した場合は、操作完了後に手動でシャットダウンしてください。

詳細は「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド 6.7. 一部機種においてPXEブート時の電源OFFができずマシンが起動する」を参照してください。

付録 A DHCP サーバを使用しない場合の運用をする

－「バックアップ/リストア/ディスク構成チェックをする」の手順(1)の「注:」の表と

付録 B 管理サーバを使用せずにリストア(ローカルリストア)する

－「ローカルリストア用ブータブル CD を作成する」の「注:」の表

は、以下の内容に変更となります。

管理対象マシンの「Deploy-OS」に設定している値	ブータブルCD格納フォルダ
デフォルト値を使用	DPM サーバの「詳細設定」→「全般」タブ 「Deploy-OSのデフォルト値(IA32)」に表示されている名前。 デフォルトは、「ia32_110331_26」です。 該当画面の詳細は、「リファレンスガイド Webコンソール編 2.7.1.1 「全般」タブ」を参照してください。
NEC Express5800 001	ia32_080331_24
・ NEC Express5800 002 ・ VMware ESX Virtual Machine 001 ・ Microsoft Hyper-V Virtual Machine 001	ia32_110331_26
・ NEC Express5800 006 ・ VMware ESXi Virtual Machine 002 ・ Microsoft Hyper-V Virtual Machine 002	ia32_121228_26
Microsoft Hyper-V Virtual Machine 003	ia32_180301_3a
VMware ESXi Virtual Machine 003	ia32_150413_26
VMware ESXi Virtual Machine 004	ia32_180430_3a
NEC Express5800 019	ia32_200408_3a
その他	対応する機種対応モジュールの手順書を参照してください。

・ 一括ファイル配置機能を使用する場合は、以下の章に変更があります。「一括ファイル配置ガイド」を参照してください。

－ 3.6. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル/アプリ ケーションのインストール(シナリオ方式)

・ Windows PE版Deploy-OS、および一括OS展開を利用する場合は、以下の章に変更があります。「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド」を参照してください。

－ 2. DeploymentManager へリソースを登録する

- 3.1. バックアップ
- 3.2. リストア
- 3.3. ディスク複製 OS インストール(Windows)

5. WebSAM DeploymentManager リファレンスガイド Web コンソール編

- 2.7.1. 詳細設定
「4)メインウィンドウに以下の画面が表示されますので、～」は以下の内容に変更となります。
4)メインウィンドウに以下の画面が表示されますので、「全般」、「シナリオ」、「ネットワーク」、「DHCPサーバ」、「一括OS展開」の各タブより、各項目を設定します。
各タブの説明については、「2.7.1.1 「全般」タブ」から「2.7.1.4 「DHCPサーバ」タブ」、および「一括OS展開の利用ガイド 3.2. DeploymentManagerサーバの詳細設定を変更する」を参照してください。

- 3.6.1. グループ一括操作
 - (3)の「操作」メニューの「グループ一括操作」に「マシン情報出力」を追加します。
 - 表の「グループ一括操作」に以下の内容を追加します。

マシン情報出力	グループに所属するすべての管理対象マシンの情報をcsvファイルに出力します。 詳細は、「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド 4.6. マシン情報を出力する」を参照してください。
---------	--

- 3.11.1. 「Built-in Scenarios」シナリオグループ
 - 以下のシナリオを追加します。
 - ・System_AutoDeploy
 - 「注:」に以下の内容を追加します。
 - System_AutoDeployは、一括OS展開専用のシナリオです。
 - System_AutoDeployシナリオの詳細は、「一括OS展開の利用ガイド 7.2.1.1.System_AutoDeploy」を参照してください。
- 3.11.1.5. System_LinuxChgIP/System_WindowsChgIP
「注:」の「■ System_LinuxChgIP シナリオを使用する場合は、以下の点に注意してください。」の「・NetworkManager daemon を無効に設定してください。～」は以下の内容に変更となります。
Red Hat Enterprise Linux 7 以前の場合は、NetworkManager daemon を無効に設定してください。
手順の詳細については、「オペレーションガイド 3.4.1.3 マスタイメージ作成の準備をする」の注意に記載の「■ディスク複製用情報ファイルで指定した DNS 設定を反映させるために、以下の設定をしてください。」を参照してください。
- 3.13.4. 「バックアップ/リストア」タブ
※2 の「■ ネットワークに接続している他のマシン(以下ファイルサーバと呼びます)にバックアップイメージファイルのパスの指定を行う場合は、以下の設定を行ってください。」の「2) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を起動します。～」は以下の内容に変更となります。
2)「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を起動します。
以下のサービスのプロパティを開き、「ログオン」タブの"アカウント"にチェックを入れ、管理者権限を持つユーザアカウントとそのパスワードを入力してください。
ファイルサーバ側で認証を行っていない場合でも本設定は行ってください。
 - ・DeploymentManager API Service
 - ・DeploymentManager Backup/Restore Management
 - ・DeploymentManager PXE Management (Webコンソールで「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」→「DHCPサーバ」タブ→「DHCPサーバを使用しない」を選択している場合のみ)
 - ・DeploymentManager Schedule Management
 パスワードポリシーの要件を満たすパスワードを設定してください。
DPMサーバを上書きインストールする場合、以下のサービスのログオンアカウントとそのパスワードを再設定してください。

- ・DeploymentManager API Service
- ・DeploymentManager Schedule Management

ファイルサーバについては、以下の注意点があります。

- ・ ファイルサーバにDPMサーバのサービスのプロパティに指定したアカウントとパスワードを持つユーザを作成する必要があります。
 - ・ ファイルサーバ上のイメージ格納用フォルダにここで指定するアカウントがフルコントロールでアクセスできるようにアクセス許可の設定を行ってください。
- ・ 一括ファイル配置機能を使用する場合は、以下の章に変更があります。「一括ファイル配置ガイド」を参照してください。
 - 3.13.3. 「パッケージ」タブ
 - 3.17. イメージの詳細情報
 - ・ 「パッケージ実行結果一覧」画面が新規追加されました。詳細は「一括ファイル配置ガイド」を参照してください。

6. WebSAM DeploymentManager リファレンスガイド ツール編

- 1.2. オペレーティングシステムの登録
 - 表「オペレーティングシステムの登録」の「オペレーティングシステム種別」は以下の内容に変更となります。

オペレーティングシステム種別	リストボックスから以下のオペレーティングシステムを設定します。 デフォルトは、「Red Hat Enterprise Linux 8」です。 <ul style="list-style-type: none"> ・ RedHat Enterprise Linux 3,4,5/VMware ESX/Citrix XenServer(※1) ・ Red Hat Enterprise Linux 6 ・ Red Hat Enterprise Linux 7 ・ Red Hat Enterprise Linux 8
-----------------------	---


- 表「オペレーティングシステムの登録」の「initrd.img/vmlinuzのフォルダ」は以下の内容に変更となります。

initrd.img/vmlinuzのフォルダ	フロッピーディスクのドライブが表示されます。デフォルトは、「A:¥」です。 「参照」ボタンをクリックして、「initrd.img/vmlinuz」が格納されている箇所を指定して設定できます。 Red Hat Enterprise Linux 6以降の場合は、インストール用ISOファイルをマウントしてimages/pxebootを指定してください。
--------------------------------	--

- 1.3.1.1. ディスク複製用情報ファイルの作成
 - 表「基本情報」の「OS種別」は以下の内容に変更となります。

OS種別	インストール時のOS種別を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ Workstation x86 for Win10 x86のWindows10を使用する場合に選択してください。 ・ Workstation x64 for Win10 x64のWindows10/Windows 11を使用する場合に選択してください。 ・ Workstation x86 for vista or later x86のWindows 7/Windows 8/Windows 8.1を使用する場合に選択してください。 ・ Workstation x64 for vista or later x64のWindows 7/Windows 8/Windows 8.1を使用する場合に選択してください。 ・ Server x86 for 2008 or later x86のWindows Server 2008を使用する場合に選択してください。 ・ Server x64 for 2008 or later x64のWindows Server 2008/Windows Server 2008 R2/Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016/Windows Server 2019/Windows Server 2022を使用する場合に選択してください。 (※1)
-------------	--

- 「(7)「基本情報」画面の設定後、～」は以下の内容に変更となります。
- (7)「基本情報」画面の設定後、「次へ」ボタンをクリックすると、以下の画面が表示されますので、各項目を設定します。
- Windows 10/Windows 11 以外の場合は、以下の画面が表示されます。



ユーザー情報

ユーザー名

会社名

プロダクトキー

国と地域

タイムゾーン (GMT+09:00) 大阪,札幌,東京

言語設定 Japanese (Japan)


Windowsを自動的に保護するように設定してください

推奨設定を使用します

お使いのコンピュータの現在の場所を選択してください

家庭

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル



ユーザー情報

ユーザー名

会社名

プロダクトキー

国と地域

タイムゾーン (GMT+09:00) 大阪、札幌、東京

言語設定 Japanese (Japan)

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

<p>Administratorのパスワード</p>	<p>Administrator(管理者)権限のパスワードを設定します。</p> <p>パスワードの設定は、各OSのパスワード設定ポリシーも参照してください。</p> <p>入力できる文字数は、OSの種類によって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none"> Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016/Windows Server 2019/Windows Server 2022の場合 入力できる文字数は、半角英数字混在(英字には大小文字を含む)で3~63Byteです。 Windows 8.1/Windows 10/Windows 11の場合 入力できる文字数は、63Byte以内です。 <p>使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。ただし、以下の半角記号と、半角スペース/半角カナ/全角文字は使用できません。</p> <p>"</p> <p>ディスク複製用情報ファイル(Windowsパラメータファイル)を使用する場合は、以下の半角記号も使用できません。</p> <p>,</p> <p>設定必須ではありません。</p>
-----------------------------------	---

パスワード	<p>パスワードを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> Windows Server 2012/Windows Server 2012 R2/Windows Server 2016/Windows Server 2019/Windows Server 2022 入力できる文字数は、半角英数字混在(英字には大小文字を含む)で3～14Byteです。使用できる文字は、半角英数字/半角記号です。ただし、以下の半角記号は、使用できません。 " , Windows 8.1/Windows 10/Windows 11 入力できる文字数は、14Byte以内です。以下の半角記号は、使用できません。 " , <p>「パスワード」は省略しないでください。省略した場合は、シナリオ実行エラーとなります。</p>
-------	--

・ 1.3.3. ディスク複製用情報ファイルの作成(Linux)

－ 「**■ ネットワーク情報設定**」の「注:」の

「**■ NetworkManager daemon**が有効な環境では、ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定は～」は以下の内容に変更となります。

■ Red Hat Enterprise Linux 7以前で、NetworkManager daemonが有効な環境では、ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定は反映されません。

詳細は、「オペレーションガイド 3.4.1.3 マスタイメージ作成の準備をする」の注意に記載の「**■ ディスク複製用情報ファイルで指定したDNS設定を反映させるために、以下の設定をしてください。**」を参照してください。

－ 表「ネットワーク情報設定画面」の「ホスト名」に以下を追加します。

Red Hat Enterprise Linux 8 以降の場合は、使用できる文字は、半角英数字と以下の半角記号です。

－ 表「ネットワーク情報設定画面」の「IPv6設定」は以下の内容に変更となります。

IPv6設定	<p>「IPv6設定」チェックボックスにチェックを入れると、IPv6アドレスの設定ができます。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 6/7/8/9に対応しています。</p> <p>デフォルトは、チェックボックスのチェックが外れています。</p>
--------	--

・ 1.3.5. OS クリアインストール用パラメータファイル作成(Linux)

－ 表「インストールパラメータ設定ツール」の「インストール OS」、「※1」と「注」は以下の内容に変更となります。

インストールOS (設定必須)	<p>インストールOSの種類をリストボックスから選択します。</p> <p>デフォルトは、「Red Hat Enterprise Linux 8」です。</p> <p>インストールOS選択時、ブートディレクトリが未入力の場合は、選択したインストールOSに該当するブートディレクトリのデフォルトが、ブートディレクトリに設定されます。(※1)</p>
--------------------	---

※1 インストールOSは、一覧から以下のLinux OSが選択できます。

インストールOS	ブートディレクトリデフォルト	対応アーキテクチャ
Red Hat Enterprise Linux 6	RedHatServer6	x86/x64
Red Hat Enterprise Linux 7	RedHatServer7	x64
Red Hat Enterprise Linux 8	RedHatServer8	x64

注:

■ Red Hat Enterprise Linux 6以降は対応するOSを選択してください。

－ 表「パッケージ情報設定」の「導入パッケージグループ設定」は以下の内容に変更となります。

導入パッケージグループ設定	<p>インストール作業で導入するソフトパッケージグループを設定します。一覧から選択してください。複数選択できます。</p> <p>一覧は、「基本情報設定」画面の「インストールOS」により内容が変わります。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 7の場合は、以下の項目も選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Base ・ Network File System Client ・ GNOME(、またはKDE) <p>「Xウィンドウ情報設定」画面で指定した内容に合わせて、「GNOME」、または「KDE」のいずれかを選択してください。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 8以降の場合は、以下の項目も選択してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Base-x ・ Network File System Client ・ GNOME <p>「Xウィンドウ情報設定」画面で指定した内容に合わせて、「GNOME」を選択してください。</p>
----------------------	---

- 表「認証情報設定」の「認証方法」と「NIS認証を有効にします」は以下の内容に変更となります。

認証方法	<p>ユーザ認証方法を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シャドウパスワードを使用します ユーザパスワードにシャドウパスワードを使用する場合にチェックを入れてください。 ・ MD5を使用します ユーザパスワードにMD5暗号化を使用する場合にチェックを入れてください。 <p>Red Hat Enterprise Linux 8以降の場合は、本項目は設定できません。</p>
NIS認証を有効にします	<p>NIS(Network Information Service)認証を行う場合は、「NIS認証を有効にします」のチェックボックスにチェックを入れてください。</p> <p>Red Hat Enterprise Linux 8以降の場合は、本項目は設定できません。</p>

- 表「ネットワーク情報設定」の「ホスト名」に以下を追加します。
Red Hat Enterprise Linux 8 以降の場合は、使用できる文字は、半角英数字と以下の半角記号です。

・ -

- ・ 一括ファイル配置機能を使用する場合は、以下の章に変更があります。「一括ファイル配置ガイド」を参照してください。
 - 1.4. パッケージの登録/修正
 - 1.4.1. Windows パッケージ作成
 - 1.4.2. Windows パッケージ修正
 - 1.4.3. Linux パッケージ作成
 - 1.4.4. Linux パッケージ修正
 - 1.5. 登録データの削除
- ・ Windows PE版Deploy-OS、および一括OS展開を利用する場合は、以下の章に変更があります。「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド」を参照してください。
 - 4.1. ディスク構成チェックツール

7. WebSAM DeploymentManager リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

- ・ 1.7. データベース移行手順
本資料の「7.1.データベース移行手順」の内容に変更します。詳細は「7.1.データベース移行手順」を参照してください。

・ 3.12. 自動更新

– Q143の「<詳細情報4>」の表は以下の内容に変更となります。

OS名
Windows Server 2012 Standard
Windows Server 2012 Datacenter
Windows Server 2012 R2 Standard
Windows Server 2012 R2 Datacenter
Windows 8.1 Pro
Windows 8.1 Enterprise
Windows 8.1 Pro x64
Windows 8.1 Enterprise x64
Windows 10 Pro
Windows 10 Enterprise
Windows 10 Pro x64
Windows 10 Enterprise x64
Windows 11 Pro x64
Windows 11 Enterprise x64
Windows Server 2016 Standard
Windows Server 2016 Datacenter
Windows Server 2019 Standard
Windows Server 2019 Datacenter
Windows Server 2022 Standard
Windows Server 2022 Datacenter

・ 3.9.2. バックアップ/リストア/ディスク構成チェック

– Q92 の表は以下の内容に変更となります。

「Deploy-OS」に設定している値	ドライバファイル格納フォルダ ※
デフォルト値を使用	<p><イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%<デフォルト></p> <p>上記の<デフォルト>とは、DPMサーバの「詳細設定」→「全般」タブ「Deploy-OSのデフォルト値(IA32)」に表示されている名前です。デフォルトは、「ia32_110331_26」です。</p>
NEC Express5800 001	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%ia32_080331_24
NEC Express5800 002	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%ia32_110331_26
VMware ESX Virtual Machine 001	
Microsoft Hyper-V Virtual Machine 001	
NEC Express5800 006	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%ia32_121228_26
VMware ESXi Virtual Machine 002	
Microsoft Hyper-V Virtual Machine 002	
VMware ESXi Virtual Machine 003	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%ia32_150413_26
NEC Express5800 019	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%ia32_200408_3a
その他	<p><イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux%drivers%<ia32_xxxxxx_xx> (x: 数字)</p> <p>上記の<ia32_xxxxxx_xx>は、対応する機種対応モジュールの手順書を参照して決定してください。</p> <p>例: DPM60_007eの場合→ia32_130726_26となります。</p>

・ 3.19.障害発生時の情報採取

– 「■ ログ採取手順(Windows x86/x64)」に以下の内容を追加します。

Windows PE版Deploy-OS、または一括OS展開の機能を利用している場合は、追加で以下のログの採取をお願いします

す。

<Windows PEイメージ作成・配置ツールのログ>

以下のフォルダに格納される情報をフォルダごと採取してください。

<DPMサーバのインストールフォルダ>¥DPMWinPE¥WinPEBuildImage
(既定値 C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager¥DPMWinPE¥WinPEBuildImage)

※DPMサーバ以外のマシンで、Windows PEイメージ作成・配置ツール(WinPEBuildImage.bat)を実行した場合はツールと同じフォルダにログが出力されますので、そのフォルダごと採取してください。

- 3.19.障害発生時の情報採取
- 「■ ログ採取手順(Linux)」の「・システム設定ファイル」に以下の内容に変更します。

・システム設定ファイル

/etc/hosts
/etc/resolv.conf
/etc/sysconfig/network
/etc/sysconfig/clock(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
/etc/sysconfig/iptables(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
/etc/sysconfig/ipchains(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
/etc/rc.d/rc(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-*ファイル
/etc/NetworkManager/system-connections/フォルダ配下の全ファイル (存在する場合)

- 付録 D ネットワークポートとプロトコル一覧
- 「・管理サーバと管理対象マシンの通信」に以下の内容を追加します。

バックアップ/ リストア、ディ スク複製OS インストール (ファイル共 有)※16		445	不可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
---	--	-----	----	-----	---	---------	----	----	--

※16 Windows PE版Deploy-OS用のファイル共有に使用します。

Windows PEを使用して、バックアップ/リストア、ディスク複製OSインストールを利用する場合に開放する必要があります。DPMサーバのインストール時に自動で開放されないため、手動で開放してください。

Windows PEを使用しない場合は、開放する必要はありません。

- 付録 E DPMが出力するログ
- 「■DPMサーバ」に以下の内容を追加します。

フォルダ	<イメージ格納用フォルダ>¥upload¥winpedpmupload (デフォルト: C:¥Deploy¥upload¥winpedpmupload)
ファイル	管理対象マシンのMACアドレス_B.zip 管理対象マシンのMACアドレス_B_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス_R.zip 管理対象マシンのMACアドレス_R_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス_P.zip 管理対象マシンのMACアドレス_P_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス.zip 管理対象マシンのMACアドレス_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス_D.zip
出力内容	バックアップ/リストア/ディスク構成チェック時の管理対象マシン側の実行結果
記録方法	管理対象マシンごとにMACアドレスで個別に管理します。 各ファイルの最大サイズ(管理対象マシンのMACアドレス_D.zipを除く)は、約310KByte+(処理対象のディスク数×約50KByte)です。 なお、UEFIモードの管理対象マシンの場合は、約460KByte+(処理対象のディスク数×約50KByte)となります。 また、管理対象マシンのMACアドレス_D.zipは、約4.6MByteです。

	シナリオを実行するたびにファイルを上書きします。 各ファイルとも手動で削除できます。
--	---

- ・ Windows PE版Deploy-OSを利用する場合は、以下の章に変更があります。「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド」も合わせて参照してください。
 - 2. 注意事項
 - 3. トラブルシューティング
 - 付録 E DPMが出力するログ
- ・ 一括OS展開を利用する場合は、以下の章に変更があります。「Windows PE版Deploy-OSの利用ガイド」および「一括OS展開の利用ガイド」も合わせて参照してください。
 - 2. 注意事項
 - 3. トラブルシューティング
 - 付録 E DPM が出力するログ

7.1. データベース移行手順

本章では、データベース移行手順を説明します。

7.1.1. SQL Server を使用している場合のデータベース移行手順

本章では、データベース移行手順を説明します。

注:

- 本手順はMicrosoft SQL Server 2012以降をサポートします。
- 手順どおりに行わなかった場合は、管理サーバが正常に動作しなくなります。
- 移行先ではSQL Serverのインストールパス/アーキテクチャ/インスタンス名などを移行元環境と同じ設定にしてインストールを行ってください。
- 「SQL認証」を指定する場合は、SQLインスタンスの認証モードは「混合モード」を設定してください。
- データベース移行先を、管理サーバと別のマシンで構築している場合に、「Windows認証」を指定する際は、管理サーバマシンとデータベースサーバの両方ともドメインに参加している必要があります。
- SQL Server 2016以前をインストールする場合は、Microsoft SQL Server 2012 Native Clientが既にインストールされていると、インストールに失敗する場合があります。Microsoft SQL Server 2012 Native Clientをアンインストールして、SQL Serverを再インストールしてください。

- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (3) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DeploymentManager」という名前で始まるサービスをすべて停止します。
- (4) データベース移行先のマシンで SQL Server インスタンスを構築します。
移行先のデータベース認証に「SQL認証」を指定する場合は、手順の詳細については、「インストールガイド 付録 D データベースサーバにSQL Serverのデータベースを構築する」の「■データベースを構築する」を参照してください。
移行先のデータベース認証に「Windows認証」を指定する場合は、手順の詳細については、「インストールガイド 付録 D データベースサーバにSQL Serverのデータベースを構築する」の「■データベースを構築する」の(1)～(6)、(8)～(13)を参照してください。
- (5) DB データをデータベース移行元からデータベース移行先へ移行します。
手順の詳細については、「リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編 1.4.1. データバックアップ手順」の(5)～(7)と「リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編 1.4.2. データ復旧手順」の(4)～(7)を参照してください。
- (6) データベース移行先で、アクセスするドメインユーザを作成します。
データベース移行先と管理サーバがドメインに参加している場合は、コマンドプロンプトを起動して、以下のコマンドを実行してください。それ以外は、(8)へ進んでください。

(以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載している箇所がありますが、1行で入力してください。)

```
C:¥>sqlcmd -E -S .¥インスタンス名
1> CREATE LOGIN [ドメイン名¥DPMサーバのユーザ名] FROM WINDOWS
    WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'ドメイン名¥DPMサーバのユーザ名',
    @rolename = N'sysadmin'
2> go
1> CREATE LOGIN [ドメイン名¥DPMサーバのコンピュータ名$] FROM WINDOWS
```



```

WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'ドメイン名¥DPMサーバのコンピュータ名$',
@rolename = N'sysadmin'
2> go
1> exit

```

例)

```

C:\>sqlcmd -E -S .\DPMDBI
1> CREATE LOGIN [MCIPT¥test2] FROM WINDOWS WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'MCIPT¥test2', @rolename =
N'sysadmin'
2> go
1> CREATE LOGIN [MCIPT¥computer2$] FROM WINDOWS WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'MCIPT¥computer2$',
@rolename = N'sysadmin'
2> go
1> exit

```

(7) データベース移行先の「SQL Server Browser」サービスの「スタートアップの種類」を「自動」に変更した後、サービスを開始します。

(8) データベース移行先で、Windows ファイアウォールを設定し、以下のプログラムの通信を許可します。
・プログラム: sqlbrowser.exe

注:

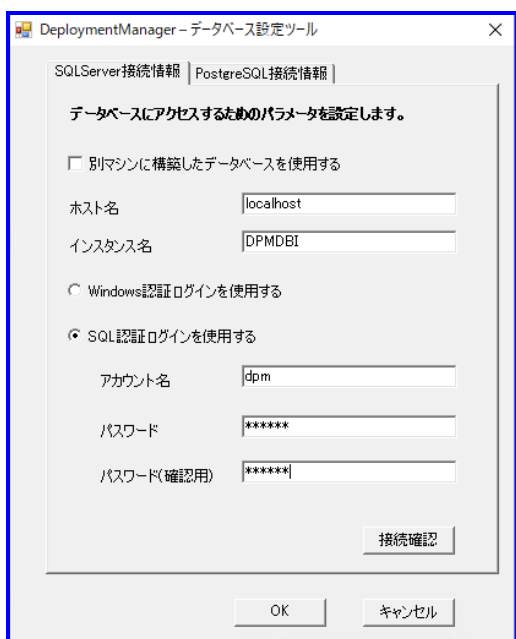
- sqlbrowser.exe のインストールパスのデフォルトは、以下です。
C:¥Program Files (x86)¥Microsoft SQL Server¥90¥Shared

(9) (3)で停止したサービスをすべて開始します。

(10) 管理サーバで DPM サーバをインストールしたフォルダに移動し、データベース設定ツール(DPMDBIConfig.exe)を実行します。

注:

- DPM サーバのインストールフォルダのデフォルトは、以下です。
C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager



画面が表示された後に、「SQL Server 接続情報」タブの各項目を設定し、「接続確認」ボタンをクリックします。「接続が成功しました」というメッセージが出た後、「OK」ボタンをクリックします。
「DPM のサービスを停止して設定を保存します。保存後は自動的にサービスを起動します。保存してもよろしいですか?」のメッセージが表示されますので、「はい」をクリックします。
「データベースの設定が完了しました」というメッセージが表示されます。
ツールを閉じる場合は、「キャンセル」ボタンをクリックしてください。

注:

- 画面でのインスタンス名、アカウント名、パスワードについては、(4)で構築されているデータベース移行先の設定値と同じ値を設定してください。
 - データベース移行先を、管理サーバと別のマシンで構築している場合は、「データベースを別マシン上に構築する」を選び、「ホスト名」にデータベース移行先のホスト名またはIPアドレスを入力してください。
 - ・ホスト名を用いてデータベース接続する場合は、データベース移行先のWindowsファイアウォールの受信の規則で「ネットワーク探索(NB名受信)」を有効にしてください。
 - ・IPアドレスを用いてデータベース接続する場合は、DNSの逆引きができるように設定してください。
設定を行わない場合は、データベース接続や処理に時間がかかり、DPMサービスの起動に失敗する場合があります。
-

(11) 管理サーバでコマンドプロンプトを起動して、以下のコマンドを実行してください。

(以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載している箇所がありますが、1行で入力してください。)

```
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%svcctrl.exe" -remove -c "apiserv.exe" "apiserv"  
"DeploymentManager API Service"  
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%svcctrl.exe" -remove -c "schwatch.exe" "schwatch"  
"DeploymentManager Schedule Management"  
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%apiserv.exe" /service  
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%schwatch.exe" /install
```

(12) 以下のサービスを開始します。

- ・ DeploymentManager API Service

DeploymentManager Schedule Management は自動で開始されます。

(13) データベース移行元で SQL Server インスタンスをアンインストールします。

手順の詳細については、「インストレーションガイド 付録 D データベースサーバに SQL Server のデータベースを構築する」の「■ データベースをアンインストールする」を参照してください。

7.1.2. PostgreSQL を使用している場合のデータベース移行手順

注:

- 本手順はPostgreSQL 9.6以降をサポートします。

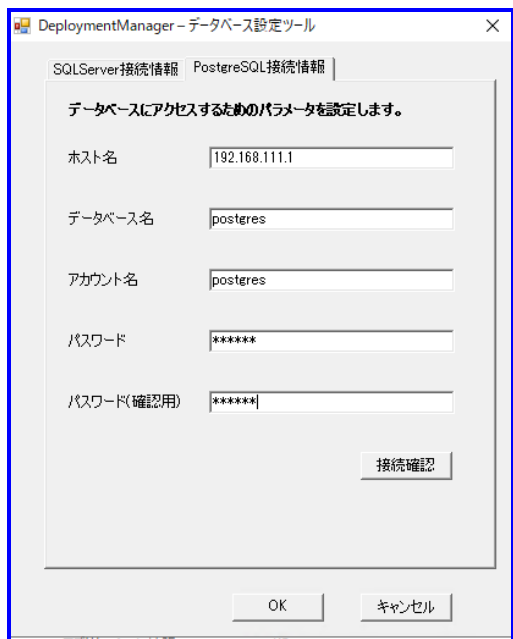
- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (3) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DeploymentManager」という名前で始まるサービスをすべて停止します。
- (4) データベース移行先のマシンでデータベースインスタンスを構築します。

データベース移行先のマシンでPostgreSQL インスタンスを構築します、手順の詳細については、「インストレーションガイド 付録 E PostgreSQL のデータベースを構築する」の「■データベースを構築する」を参照してください。
- (5) DB データをデータベース移行元からデータベース移行先へ移行します。

手順の詳細については、「リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編 1.4.1. データバックアップ手順」の(5)～(7)と「リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編 1.4.2. データ復旧手順」の(4)～(7)を参照してください。
- (6) (3)で停止したサービスをすべて開始します。
- (7) 管理サーバで DPM サーバをインストールしたフォルダに移動し、データベース設定ツール(DPMDBIConfig.exe)を実行します。

注:

- DPM サーバのインストールフォルダのデフォルトは、以下です。
C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager



画面が表示された後に、「PostgreSQL接続情報」タブの各項目を設定し、「接続確認」ボタンをクリックします。「接続が成功しました」というメッセージが出た後、「OK」ボタンをクリックします。
「DPMのサービスを停止して設定を保存します。保存後は自動的にサービスを起動します。保存してもよろしいです

か？」のメッセージが表示されますので、「はい」をクリックします。
「データベースの設定が完了しました」というメッセージが表示されます。
ツールを閉じる場合は、「キャンセル」ボタンをクリックしてください。

注:

- 画面でのインスタンス名、アカウント名、パスワードについては、(4)で構築されているデータベース移行先の設定値と同じ値を設定してください。
 - 「ホスト名」にデータベース移行先のホスト名またはIPアドレスを入力してください。
 - ・ ホスト名を用いてデータベース接続する場合は、データベース移行先のWindowsファイアウォールの受信の規則で「ネットワーク探索(NB名受信)」を有効にしてください。
 - ・ IPアドレスを用いてデータベース接続する場合は、DNSの逆引きができるように設定してください。
設定を行わない場合は、データベース接続や処理に時間がかかり、DPMサービスの起動に失敗する場合があります。
-

- (8) データベース移行元でPostgreSQLインスタンスをアンインストールします。
手順の詳細については、「インストレーションガイド 付録 E PostgreSQL のデータベースを構築する」の「■ 管理サーバと同一マシン上のデータベースをアンインストールする」、または「■ 管理サーバとは別のマシン上のデータベースをアンインストールする」を参照してください。